

# 県中教研 道徳部会だより

第 37 号

発行日 令和4年3月  
発行所 富山市千歳町1-5-1  
富山県中学校教育研究会  
編集責任者 柳原 昌人  
題 字 金山 泰仁 先生

## 道徳的価値と道徳的価値観

指導主事 荒瀬 典子

「全ての人間は二種類に分けられる。楽で楽しく生きる奴とそうじゃない奴」ある映画に出てきた、野球部の元キャプテンの言葉です。この時、彼は楽で楽しいことに価値を感じています。しかし、これは彼の心理状態が反映された故の発言でした。キャプテンとして努力を惜まず、熱心に練習していた彼は、最後の試合に負けたことをきっかけに変わってしまいました。一方で、そのような自分に少し嫌気がさしていることも、彼自身気付いていたのです。心の葛藤や迷いから足踏みしてしまうことは、誰にでもあります。そんなとき、自分を支えてくれる力となるのが道徳的価値観ではないでしょうか。

子供が自身の道徳的価値観を磨くには、道徳科の授業の充実が必要です。道徳科の目標は、道徳的価値について考え、よりよく生きるための道徳性を養うことです。道徳的価値について理解する学習を欠くことはできません。しかし、特定の道徳的価値を絶対的なものとして指導したり、単に道徳的価値のよさや大切さを観念的に理解させたりすることのないように配慮することが大切です。子供は、「道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」を通して、道徳的価値観を形成し磨いていきます。その価値観が、いつか困難に直面した際、自分なりの方法で乗り越える力になるのです。元キャプテンの彼がもし、道徳科の授業を通してもっと道徳的価値観を磨いていたとしたら、冒頭の言葉も違っていただかもしれません。

教師自身の道徳的価値と内容項目の理解が重要です。そして、自分の考え方や経験を振り返り、教師自身が自分の事として考えることで、授業の幅を広げることができます。子供と共に考え、共に語り合い、子供が道徳的価値観を磨くことのできる道徳科の授業をつくっていききたいものです。

(東部教育事務所)

## 授業を構想するあたり

部長 柳原 昌人

道徳科の授業において、各学校では考え、議論する道徳」への転換を図っておられることと思います。この言葉には、答えが一つではない道徳的課題を自分ごととして受け止め、自分との関わりの中で考え、みんなで議論し合い、人間としての生き方についての考えを深める授業への質的転換を図るという意味が込められています。そのような授業を行うためには、深い教材研究と、綿密な授業構想が必要です。

文部科学省・教科調査官 浅見哲也先生によると授業構想の手順として、「①授業のねらいを確認する②教材の中心場面と発問を考える③中心的な発問の前後の発問を考える④話合いの前提となる条件を確認する⑤導入と終末で行うことを考える⑥指導方法を考える⑦時間配分を考える」というルーティンで決めるとよいとされています。

授業を構想する際、再確認してもらいたいのは、「導入」→「展開」→「終末」の順序で授業の流れを考えるのではなく、まずは、「展開」にあたる中心発問を先に考える。次に「導入と終末で行うこと」を考え、最後に話合い活動、書く活動、ICT活用等の「指導方法」を考えるということです。授業経験の浅い教員の中には、よい授業を見せたいという思いから「指導方法」そのものが目的になった「活動あって学びなし」の授業を見かけることがあります。「指導方法」の工夫は、道徳性を養うために行われる学習活動をより効果的に行う手段であり、目的ではないことを押さえておく必要があります。

日々、多忙な中、授業をゆっくり構想する時間をなかなかとれないと思いますが、基本的な授業構想の考え方を押さえた上で、「考え、議論する道徳」、つまりは「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を進めていただきたいと思います。

(高・南星中)

# 第65回 研究大会報告

東 部 地 区

富山市立芝園中学校

東部地区大会では、富山市立芝園中学校を会場として、全学級担任による授業提案が行われた。本日よりでは、県の研究主題であるB項目で授業公開を行った3クラスについて報告する。

## 〈第1学年〉 星野 悟志 教諭

坂田 裕美 臨任講師

主題 その人が本当に望んでいること B

教材 「思いやりの日々」

(出典：東京書籍「新しい道徳1」)

難病の妻を介護する主人公の気持ちを通して、人間の生き方について考えを深めることをねらいとした授業であった。T1・T2としての役割を明確にした授業スタイルで、生徒の声をより多く引き出す工夫がみられた。中心発問では、効果的な補助発問や問い返しが行われたことで、「思いやり」について考えを深めていた。



## 〈第2学年〉 佐野 美帆 教諭

主題 本当の友情とは B

教材 「みんなでとんだ!」

(出典：東京書籍「新しい道徳2」)

運動会の種目に障害のあるクラスメイトを入れると勝負に勝てないのではないかと、揺れる級友と主人公を描いた教材を通して、生徒は互いを理解し、深い友情を育てることの大切さに気付いていた。中心発問では、仲間と協力することや団結することの素晴らしさに気づき、友情の尊さについての理解を深めていた。終末では、実写動画を視聴し、自分ごととして捉えていた生徒の涙が印象的であった。

## 〈第3学年〉 増原 透 教諭

主題 周りの人に支えられて B

教材 「埴生の宿」

(出典：東京書籍「新しい道徳3」)

感情を失った女子生徒が、合唱を通じてクラスの仲間と関わり、前向きに変容していく教材を扱うことで、思いやりとは何かを考えさせた。中心発問ではホワイトボードを活用したグループ活動を取り入れて考えを可視化し、共有したことで、人それぞれの個性や特徴を認めることの大切さ、集団として成長することの重要性に気付くことができた。さらに、教師の穏やかな語りや教材に出てくる歌の披露等の工夫により生徒は授業に引き込まれていた。



部会協議の指導助言は、荒瀬典子指導主事（東部教育事務所）から、研究大会全体の総評として次の助言をいただいた。

- ・どの授業においても、自分の考えをもたせるために、個人で考える時間や仲間と考えを共有する時間の設定がしっかりとなされていた。
- ・構造的な板書の工夫をすることで、生徒の思考の流れを可視化することができる。
- ・生徒の発言をつなぐ板書やイラスト、写真等を効果的に活用し、友達の意見を整理することで価値観の深まりを明確にすることができる。

近島 直美（富・西部中）

〔研究主題〕主として人との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか。―道徳的諸価値の理解を基に、道徳的な考えを深める発問の工夫―

## 西部地区

## 小矢部市立蟹谷中学校

西部地区大会では、小矢部市立蟹谷中学校を会場に松本大輔教諭、杉森太一教諭による授業提案が行われた。両授業ともに「情報モラルと友情」を主題としたが、導入で「友達」に関するアンケート結果等を提示し、「情報モラル」についての学習とならないよう、ねらいとする価値の方向性を定めていた。

### 〔第1学年〕松本 大輔 教諭

主題 情報モラルと友情 B

教材 「短文投稿サイトに友達の悪口を書く」と

〔出典：東京書籍「新しい道徳1」〕

導入では、「短文投稿サイトに友達の悪口を書く」と続く文章を考えさせることで、教材に関する興味・関心を高めていた。自分の考えを広げるための活動として、座席の前後で意見交換したり、教室を自由に行き来してノートの記入内容を確認したりして、級友と考えをシェアしていた。終末場面では、導入で提示した「友達」についてのアンケート結果と、授業によって深められた自分の考えとを比較することができ、自分の心の変容を感じられる仕掛けとなっていた。

横山恵指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

- ・男子と女子の人数バランスが極端に偏っていたが、日頃からの人間関係づくりのおかげで、自分の考えを気軽に伝え合えることができていた。
- ・導入でアンケート結果を提示したことで、冒頭から授業内容を自分ごととして捉えられていた。展開では個人で考える時間を十分にとり、シェアや話し合い活動で多面的・多角的な意見に触れ、終末で個人の考えを深めるといった授業の流れがよかった。
- ・道徳科の授業において、どう発問するかが難しい部分である。「本当の友情を築くために何が大切だと思うか」や「本当の友情とは何だろう」等、様々な発問の仕方があるが、どの問い方が

ねらいとする道徳的価値に迫ることができるのか吟味することが大切である。

### 〔第3学年〕杉森 太一 教諭

主題 情報モラルと友情 B

教材 「合格通知」

〔出典：東京書籍「新しい道徳3」〕

教師の範読を聞く際に、「友達として問題だと思った行動や場面」に線を引きながら読むよう指示があった。範読後に、線を引いた部分について話し合うことで、思考が途切れることなく活動することができていた。展開では「誰かが悪い」とならないよう、登場人物3人のそれぞれの問題に対して考えていった。生徒の発言に対して、「なぜ?」「どうすればよかった?」「〇〇さんからするとどんな気持ち?」等、細かく問い返しがされており、生徒の思いを引き出していた。

池田宗介指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

- ・SNSについての課題は、特別活動の内容になりがちである。本時では、導入で「友達」についてのアンケートを提示したり、「真の友情について考えよう」といった課題を提示したりしたことで、ねらいとする価値についてしっかり考えることができていた。
- ・最終的なゴールイメージを教師がもち、生徒の思考を予想して中心発問を吟味することが大切である。また、本時のように授業の中で「なぜ」「どうして」「どのくらい」等の問い返しをして、生徒の発言の奥にある思いを引き出せるとよい。
- ・道徳の授業は資料を読むだけではなく、考え議論することが大切である。また、自分の思いや考えを深められる時間を十分にとり、多面的・多角的に考えるためには、考え方は一つではないことを教師が生徒に伝えていくとよい。

山崎 大介（砺・出町中）

# 研究主題解明のためのICTの活用について

今年度の研究大会では、コロナ禍においてグループ学習が制限される中、ICTを活用した取組が行われました。

**【氷見市の取組】** 北部中学校で行われた「令和3年度氷見市中教研研究大会」の様子

氷見市では、北部中学校三善智妃呂教諭が「心から信頼できる友達（第3学年）内容項目 B-（イ）友情、信頼 教材名「ライバル」（出典『中学生の道徳 自分をのばす3』廣済堂あかつき）」の授業を行った。本来であれば、「真の友情」について少人数グループや学級全体で活発に意見交換をさせたいと考えていたが、当時は新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっており、普段のやり方では感染拡大が懸念された。そこで、タブレットPCを用いて、生徒全員の意見を電子黒板に映し出し、画面上で多様な考え方に触れさせることにした。



「真の友情」について、自分の考えを発表する生徒

## 1 効果的であったこと

コロナ禍においてグループ学習が制限される中、ICTを活用した意見交換は、多様な意見を引き出し、交流させたりする点において効果的であった。

## 2 残された課題

ICTを活用して自分の意見を発表させる場面では、単に打ち込んだことを発表させるだけではなく、その背景にある自分の思いを語らせる必要がある。その際、教師から生徒への「揺さぶり」があると、生徒はより道徳的諸価値に関わる事象を自分ごととして考えることができるようになって考えられる。

中山 隼人（氷・西條中）



自分の意見をタブレットPCに入力し、電子黒板に送信する生徒



生徒から「真の友情」に関する自分の考えが送信された電子黒板